



イーゼンハイム祭壇画

ほふ^{ほふ}ば^ばに引かれる小羊のように、
毛を切る者の前に物を言わない羊のように、
彼は口を開かなかった。

(イザヤ書 53 章7 節)

見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。(29)

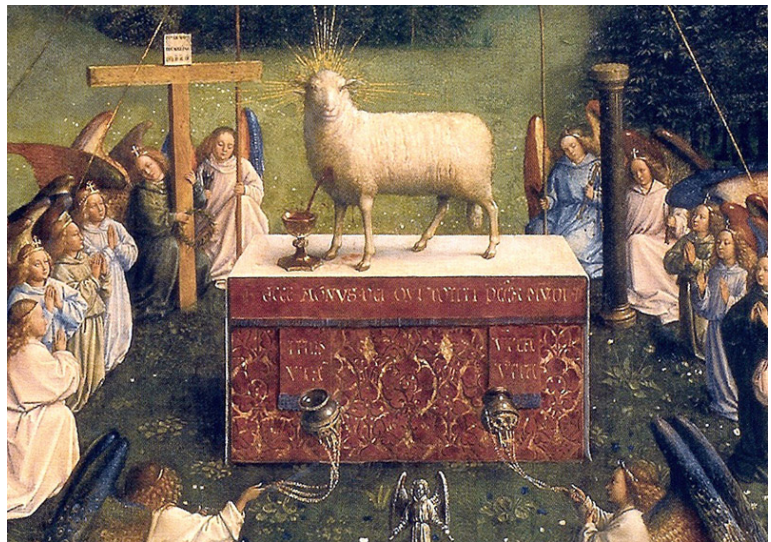
“霊”^{くだ}が降って・・・とどまるのを見たら、
その人が、聖霊によって洗礼^{バプテスマ}を授ける人である。

わたしはそれを見た。

この方こそ 神の子である。(33、34)

ヨハネによる福音書 I 章 29～34 節

「世の罪を取り除く神の小羊」



ゲントの祭壇画

「心は、二つの寝室のある家です。一方の部屋には苦しみが、一方には喜びが住んでいます」。作家カフカのことばである▼つぎのように言い換えることもできようか。「一方の部屋には善が、一方には悪が住んでいます」と。

(「天声人語」『朝日新聞』)

*主婦による幼稚園児^{わかやまはるな}(若山春奈ちゃん) 殺害事件に関連して(1999 年)

「自分こそが一番恐ろしい存在」

「人間として生まれて一生の間に、どうしても出会わねばならぬ人が、一人いる。それは自分だ」という言葉を聞いたことがあります。三十数年、私の学んできた仏教の道は、このこと一つを呼びかけているとっていいと思います。「自己とは何ぞや。是れ人生の根本問題なり」と、明治の念仏の先覚、清沢 満之はいいます。人間の生き方を、親鸞は必須条件として、まず「自分自身を深く見つめる〔こと〕」といわれます。三十幾年の学びを通じ、及ばずながら私も、そのこと一つを学んでいるのです。

じゃあ、自分と出会うと、どういう自分が見えるのか。ある動物園で、「世界で一番恐ろしい生き物」と表示してある檻の前に立つと、そこに一枚の鏡が置いてあり、自分の姿が写るようになっていた、と聞いたことがあります。自分に出会うとは、世界中で一番恐ろしい生き物こそ自分だと気づかされる。仏道はまさにそれ。親鸞の語録「歎異抄」は、まさしく悪人の自覚を目覚めさせ、悪人正機の書です。つまり、世界中で一番恐ろしい自分の自覚。実際に私自身、経営する会社の中で、わが家庭で、隣近所とのお付き合いで、また仏教を学ぶ仲間同士で、およそ手に負えない自分中心な、わがまま勝手な自分をゴリ押ししていながら、ケロリとしている、世にも恐ろしい自分に、しょっちゅう気づかされ詰めです。

私は三十年来、仏教新聞、雑誌をご縁に、百人、二百人の念仏者の生活体験を取材し、記録させていただいてきました。最初、開口一番、「仏法から何を学びましたか」と問うと、口をそろえて、「自分を見せてもらいました、自分を知らされました」と告白されます。美しい、見上げた自分でない、世界中で一番恐ろしい自分と出会わされるのです。私自身、仏法に出会ったころ、四面鏡の箱に入れられ、自らの醜い姿に脂汗をタラリタラリ流すガマの油だと実感もし、語ったものでした。

亀井 鑛

かめい・ひろし

1929年～

会社経営者

在家仏教徒で、仏教評論家と

しても知られる

仏教新聞の編集も手がけた

「チューインガム一つ」

小学三年 ^{むらい やすこ} 村井 安子

せんせい おこらんとって
せんせい おこらんとってね
わたし ものすごくわるいことした

わたし おみせやさんの
チューインガムとってん
一年生の子とふたりで
チューインガムとってしもてん
すぐみつかってしもた
きっと かみさんが
おばさんにしらせたんや
わたし ものもいわれへん
からだか おもちゃみたいに
カタカタふるえるねん

わたしが一年生の子に
「とり」いうてん
一年生の子が
「あんたもとり」いうたけど
わたしはみつかったらいややから
いややいうた

一年生の子がとった
でも わたしがわるい
その子の百ばいも千ばいもわるい
わるい
わるい
わたしがわるい

どこかへいってしまお とおもた
でも なんぼあるいても
どこへもいくところあらへん
なんぼかんがえても
あしばっかりふるえて
なんにもかんがえられへん
わたしはどうして
あんなわるいことしたんやろ

せんせい どないしよう

車椅子の上の、まさに^{たお}斃れようとするギー兄さん〔主人公〕の肖像は、私〔松男さん〕に十字架の聖ヨハネの描いたイエスを思い出させたのです。そのイエス像は、全身から血をしたたらせながら、しかもその身体が^{からだ}据^ねじ^ま曲がるほどの力をこめて、自分を^{くぎづ}釘付けにしている重い十字架を支えています。はっきりしているのは、これだけの十字架が倒れかかってくるとして、それを支えうる者は、そこに太い釘で打ちつけられて血をしたたらせている、胸も腕も太い男しかいない、ということです。

この絵は、十字架にかけられたキリストを・・・〔向かって〕^{みぎじょうほう}右上方から〔見下ろすようにして〕描くものですが、人類がこのような視点からキリストを見ることができるようになるまでに、時が必要だった・人類に時が熟してはじめてこの視点から描く肖像が現れた、と論じた人がいます。

(『燃えあがる緑の木』より)



大江 健三郎

おおえ・けんざぶろう

1935 年～

日本を代表する小説家の一人

ノーベル文学賞を受賞

昨今は平和運動にも尽力

印象的なイメージがある。キリストの^{たっけい}磔刑の絵である。その絵は、十字架を〔向かって〕^{みぎうえ}右上の高いところから見おろす角度から描かれている。すると、^つ吊りさげられた^{かつこう}恰好のイエスが逆に〔両腕を突き上げ、^{こぶし}拳を握って頭を^{かし}傾げ〕^{こんしん}渾身の力で十字架を支えているように見える。傷ついた弱いイエスが、重荷を全身で支えているときにはじめて 聖なる力を^{きゅうせいしゅ}帯びてくる。弱い者こそが救世主になっていく。

川本 三郎

かわもと・さぶろう

1944 年～

文芸評論家、翻訳家

立教大学文学部で特任教授を務

めたことも

ダリ「十字架の聖ヨハネのキリスト」

